



新九郎通信

発行 小田原市栄町 2-13-3 (株) 伊勢治書店 3F ギャラリー新九郎 木下泰徳
 メール配信サービスご希望の方は右記アドレスへお申込みを e-mail:kinoshita@iseji.net

未曾有の大参事に誰もが心を痛めている中、今年も桜の花は、何事もなかったかのように春の訪れを告げています。苦難の中、子どもたちの健気な姿には大きな力と勇気を頂きます。節電や停電の不便さも自分のこととして受け止め、日本中が一丸となって再生を誓う新年度がスタートしました。統一地方選でも市民の力が試されます。投票する権利を義務を無駄にしないことで、皆で町づくりにも参加していきましょう。また音楽で、スポーツで、世界中の人たちができることをできる形で応援し合い希望を与えてくれます。自粛自粛で心まで枯渇させてはいけません。私達はアートの持つ力を信じ、作家としてギャラリーとして鑑賞者として、できることをできる形で行っていききたいものです。

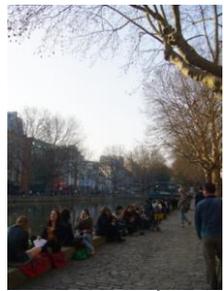
新九郎 4月の展覧会のご案内

近隣・友の会会員の展覧会情報

	会期 展覧会名	見どころ
	3/30(水)-4/4(月) 絵手紙いそしぎ会 創立10周年記念 絵手紙展	絵手紙いそしぎ会(土曜会、金曜会、まなび会) 地球・絵手紙ネット協会 特別講師：曾根猛、橋爪彌生
	4/6(水)-11(月) 柿沼朋実木版画展	第12回川上澄生木版画大賞展 大賞受賞 第24回棟方記念版画大賞展受賞 動物大好き! パワー溢れる画
	4/15(金) 新九郎デッサン会	18:15-20:45 コスチューム、固定ポーズ 会費 1500円
	4/13(水)-18(月) 長南康子絵画展	応援(お孫さん) 山本さくら・ひまわり・太陽 風景、花等の水彩画
	4/20(水)-25(月) 浩世会日本人形と 押し絵展	藤娘、花魁等の日本人形 30体 押し絵 40点 つるし飾り 30本
	4/27(水)-5/2(月) 火曜パステル会作品 展	花・静物・風景等のパステル画 会員 13名 賛助出品 高木なえ

会期・展覧会名	会場
3/30(水)~4/4(月) 第5回楽の会水彩画展	お堀端画廊 0465-23-7819
3/30(水)~4/4(月) ロビンソン 4F ギャラリー 文化芸術展	090-8846-7842(杉崎)
3/26(土)~4/4(月) 3/30 水休 十年経っても・陶素人展	うつわ菜の花 0465-24-7020
3/26(土)~4/10(日) 佐部利典彦展	すどう美術館 0465-36-0740
4/6(水)~11(月) 第21回やまぼうし工芸展	飛鳥画廊 0465-24-2411
4/6(水)~11(月) 青山美穂子作品展	お堀端画廊 0465-23-7819
4/13(水)~18(月) 渡辺正美展	お堀端画廊 0465-23-7819
4/11(月)~25(月)山本真郎展 【Black White Metallic】	宮ノ下富士屋ホテル 0460-82-2211
4/20(水)~25(月) 第13回き楽舎日本画展	アオキ画廊 0465-23-5624
4/20(水)~25(月) 石井佐一先生回顧展	飛鳥画廊 0465-24-2411
4/1(金)~30(土) 神山務写真展	はげ八鯨 火休 0465-22-0945
4/1(金)~30(土) 日・休 大谷英昭小品展(水彩画)	二宮駅北口パン屋むーに ゃん
4/10(日)~30(土) 水木定休 川城夏未展	元麻布ギャラリーカフェ茅ヶ崎 0467-88-1596
4/29(金)~5/8(日) 白石洋子風景画展	G 喫茶大磯ちいさな美術 館 0463-61-2971

パリだより 横井山泰



この度の震災で亡くなられた方々のご冥福と国土の復興をお祈りいたします。友人からの電話でTVを着けたら、とんでもない事になっていた。何がおこっているのかを知ることしか出来ず。3日間パソコンの前から離れられなかった(NHKのネット放送)。繰り返し流される映像と次々に明らかになる被災状況に、「日本は祖国なのだ」という当たり前の事を初めて意識した。フランスのTVでは日本では報道されていない内容が伝えられていたが今、振り返ってみるとデマも多かったようだ。パリ生活も5か月を切った。まだまだやりたいことが残っている。

ファッションウィークの3月、友人のブランドのパーティーに出掛けた。「絵を描いている」と言うので「観たい」というので、ファイルを観せた。拙い仏語で説明すると「買いたい」ディーラーの女性だった。こちらの人の決断の速さを実感した。翌日には半金もいただいた。彼女に限らず、僕の作品を観せた時「これは外人が好きだろう？」と描いたものには、あまり反応しない。さりげない和、どうしても出てしまう雰囲気好むようだ。いい作品であることは当然だ。来月からは近所のアトリエが使える。大きいものを作って観てもらおう。



小田原怪獣散歩

若林寧人

子供の頃から大好きな怪獣で、大好きな故郷小田原の名所や風景を紹介するイラストシリーズ

一回目の舞台は小田原城のお堀。怪獣が跨ぎ越しているのは、学橋である。かつてこの橋の向うに私の母校でもある城内小学校があった。毎日、学橋を渡って通っていた私にとって、お堀は学校と外界を隔てる、底知れぬ一種の結界だった。どんな巨大な生物が潜んでいようと不思議はないと思っていた。もともずっと後、大人になって、お堀は意外に浅いということを知り、落ちることで身をもって知る事になるのだが……イラストの中の季節は春、満開の桜である。今年ほど、また無事に桜を見られてよかったと思える春はないだろう。





柿沼朋実さんは木版画の作家だ。新九郎では2年前に個展をしていただいた。彼女の作品を初めて見たのは、その2年前。あるタウン誌であった。夫はよく自分の気に入った作品を紹介してくれるのだが今回もそれだった。画面いっぱいの牛の顔。「モモコ！」と名前を呼ばれて振り返ろうとしているような牛のスピード感と白黒のコントラストの迫力が印象的な作品だった。一度見たら忘れられないインパクトがあった。美しいとかうまいとかでなく、人の中にぐいぐい入ってくる作品に現代アートだと感じた。そして2年後、新九郎での個展が実現した。1歳の愛息子さんの子育てをしながら、よくこんななというほど大小の作品が展示された。ギャラリーにはお子さんのお遊びスペースも設け、母子が無理をしない会場も違和感ないものだった。

どうしたらこのように健やかな育ち方をするのだろうか。初対面での柿沼さんの印象だ。底抜けの明るさと笑顔、何より自然体で飾りが無い。さぞ愛情豊かに育てられたのだろう。8歳から10年間は器械体操に熱中していたという。高3の夏の大会まで主力メンバーとして活躍していた責任感から、画塾に通わずに学べる美術系の大学を選択したという。そこで木版画に出会った。熱心な先生に惹かれその魅力にのめりこんでいった。卒業制作では量2枚分の作品を一人で彫り上げた。製作後には熱を出し体調を崩したというその集中力と版画を追究する情熱は今も変わらない。

「実はいつもは子供が寝ると道具を出してここで制作してるんです。」と、リビングの引き出しから彫刻刀を出して見せてくれた。ダイニングの大きなテーブルが作業机にもなっているらしい。2階のアトリエに案内された。大きなマ

ップケースと棚にきっちり並べられた版木が無ければ、おしゃれな女子の部屋だ。壁にはユニークなお面が並ぶ。ケニア メキシコ モンゴル ボルネオ 韓国 クロアチア・・・海外出張の多いご主人のお土産と旅行で求めたものだ。飾り棚には、和紙のシェード、駱駝の皮のランプ、モザイクの陶器など趣味の良い品が並んでいる。手仕事品に惹かれ旅先から連れてきたものばかりなのだという。アトリエには柿沼作品から醸し出される独特な雰囲気とぬくもりが満ちていて、創作の原点を見せていただいた気がした。

柿沼さんのモチーフには、よく動物が登場する。愛らしいものよりちょっと癖のある動物に惹かれるという。スケッチには動物園やサファリーパークに出かけるのだそうだ。見たものをそのまま作っているのだという登場人物は、そのどれもが可愛くもありユーモラスでもあり、ちょっとドキッとさせられるグロテスクさがある。白と黒の明暗の世界に灰色が加わったようなDM作品には、新しい彫りの挑戦が見え隠れする。主にシナベニヤを使っているという版木を見せていただく。刀の跡が美しい。さぞ力があるのではと素人経験から想像したが、ほとんど力はいらないのだという。よく手入れされた彫刻刀を使っているからなのだろう。刀のメンテナンスはプロに任せてやってもらっているのだと伺い納得した。

版画というとインクを延ばす皿とローラーを使うものと思っていたが、それらしきものが無い。すると、棚から黒い液体の入ったガラス瓶を見せてくれた。ぷーンと芳醇な墨の香りが広がった。このびんで墨を手造りしているのだそうだ。奈良の老舗「古梅園」から取り寄せた練り墨を水に浸け、1年かけて作ったものだ。びんのふたには2010.5.20とあった。時間のかかった手づくりの墨を使うというの初めって知ったことだった。この墨を板に伸ばすのは、ローラーではなく刷毛だった。

江戸時代の浮世絵師達あの歌麿と同じ刷りの方法なのだととききぐっと興味を沸かした。靴磨きでおなじみの形をした刷毛は、ずいぶん使い込まれ毛先は擦りへっていた。狐や狸、いたち等毛の特徴を使い分けたり、力加減で変化する刷

りの段階では、自分の感が頼りなのだという。写し取るまでわからない作品の刷りにも、版画の醍醐味があるのだろう。

学生時代、紙を求めて全国を巡ったというほど紙へのこだわりは強い。岐阜の美濃紙、奈良の漆こし紙、吉野紙、高知の土佐紙、福井の奉書紙、マップケースには、色々な種類の紙が丁寧に寝かされていた。今最も気に入っている紙は、人間国宝岩野一兵衛氏の作る紙なのだそうだ。素人が見ただけでは違いなどわからない1枚の紙だが、300回重ね刷りしても破れないというその強さと妥協のない職人の技が生み出す紙には、彫り・墨・刷りのすべてを写し取ってくれる紙の存在は、作品の仕上げでもあり作品そのものでもあることなのだと感じてきた。



リビングに戻り、彫刻刀を見せていただいた。ハワイアンプリントの手づくりケースにしまわれた彫刻刀は思ったより小ぶりです。私の手の中にすっぽり収まる大きさだ。角柱の握りをスライドさせると中には手入れされた刃が納まっている。刃を研ぐ度に少しづつ削られていくのだろう。私はその道具の機能性と美しさに感動を覚えた今までは額装された作品だけを見ていたが、木版画とは墨・紙・刷毛・バレン・刀など多くの手仕事が結集されて生まれる作品であることを改めて知り、作品を見る楽しみがぐっと増した。

1歳だった愛息子さんは3歳となり、子育てと作家という制約の中で、この2年の準備期間ずっと頭に入れて生活してきたと個展への意気込みを語る。「子供が寝たらやる。起きるまでできる。」と限られた時間の中で密度の濃い仕事ができるようになったとあくまでも前向きだ。アートには関心が無いというサーファーで海の好きな御主人とかつて暮らしていた国府津の海を背景に静かにたたずむ「思索する人」を描いた新作からは、家族への愛と創作に情熱を傾ける作家が重なって見えた。

(新九郎友の会 木下和子)

三月のこと

三月十一日未曾有の東日本大地震は日本中を震撼とさせました。いまだ行方不明者は1万8千人。謹んで犠牲者の皆様のご冥福をお祈りします。避難生活をされている皆様には心よりお見舞い申し上げます。一刻も早い復旧を願っています。

まだ余震も続き不安な中、各種の行事が自粛されています。新九郎でも十一日のデッサン会、十九日の東京アートめぐりは中止しました。期待していた「片浦中学校で遊ぼう」の企画展覧会も中止になりました。地下街再生をかけた計画されたマルシェや環境ネットワーク祭り、春恒例の「着物で街あるき」も男女共同参画「スプリングトーク」も中止になりました。計画停電で街も店も人も活動が鈍っていますが、少しずつ慣れてきて気持ちの上では落ち着いてきたような気がします。そんな中、先週新九郎で開催された「第七回スケッチングウォーク展」には八百四十四名の入場者がありました。昨年には及ばなかったものの現状を考えると素晴らしい数字です。来場者には無料で「ヒール、紅茶、ウーロン茶のサービス」があり、皆さんゆっくりとくつろぎながら、楽しそうに歓談されていました。受付には義援金の箱も置かれ皆様の暖かいお気持ちが集まりました。二十七日(日)には「西さくら里・街のみ再発見!展」のスケッチ会を国府津の寶金剛寺で行いました。直前の案内にも関わらず二十四名の参加者があり、お天気にも恵まれ皆さん存分に腕を振るわれました。スケッチ終了後には有形登録文化財に指定された庫裏でお茶をいただきました。ご講演会となりました。

まだ心配な状況が続きます。被災地の復興には十年二十年かかることになりました。幸い被害のなかった我々には元気を出し、支援ができるように力を尽くすこと、支那がでるよう、できることやるべきことをしっかりと、助け合う気持ちを忘れないようにしたいと思います。